

クリティカル・シンキング

今後、AIに奪われてしまう仕事が多いと言われているなか、大人達は子どもの将来設計イメージを“高収入・高学歴”と言った古いものから“21世紀に成功する新しい子ども像”へとシフトしなければならないときに来ているようです。従来の教育では、ひとつの正解をなるべく早く叩き出すことがゴールとされました。想定するキャリアも直線的で、よい成績を修め、よい大学に入り、よい就職をし、よい結婚をするのが理想と思われました。ところが、時代は変わり、こうしたキャリアが必ずしも幸せには結びつかないのではないかという、疑問が出てきました。国としては豊かになったけれど、自己肯定感が低く幸せを感じづらい子どもが多いという問題が露わになったのです。そこで打ち出されたのが「考える力の育成」を盛り込んだ現行の学習指導要領。キャリアの幅が広がり、外国の方とともに働く場も増えてきた現代において、自分がどう生きればハッピーになるのかを考える力を養ってほしい。そんな思いから「自分の頭で納得がいくまで考えるスキル＝クリティカル・シンキング」や、思考をより深めるための議論のスキルが重要視されるようになってきたと言えます。

GIGAスクール（一人一台端末）の推進、乳幼児のスマホいじりなど、今後、デジタルシティズンシップが浸透していくと「情報に惑わされない人間の育成」は喫緊の課題です。クリティカル・シンキングは和訳すると「批判的思考力」。批判的思考力とは「情報を分析し、論理的に解釈して、その情報の価値を評価したり判断を下したりするために必要なスキル」と言われます。ものすごい量の情報がどんどん生み出される時代、「一歩引いて考える」「何が本当に必要なかを見極める」「答える必要のある問題を選ぶ」など、情報を断捨離ができる人は、今後重宝されていくと思われます。



【日常的な光景になるでしょうか…】

「言葉にしない」日本文化の影響

少し前に付度（そんたく：他人の気持ちを推し量ること）という言葉が流行しましたが、一般に日本人のコミュニケーションは受信者側が大きな責任を持ちます。発信者はすべての内容を言葉にしないため、受信者は推察などして「言葉にされなかった部分」を穴埋めしていくことになります。一方、クリティカル・シンキングは議論に重きを置くため、言葉で意見を表明し、言葉でフィードバックを受けることになります。ただでさえ「言葉にすること」に慣れていないのに、質問されたり、反論されたりすると、抵抗感を持つのは当然のことです。ただ、活発に議論する欧米人だって、反駁（はんぱく：他人の主張や批判に対して論じ返すこと）されて気分がいいわけはありません。けれども、言葉で議論する素地が培われているから、過剰に傷ついたり、神経質になったりすることはない。要は慣れの問題ですから、小さなうちから基礎を養っておくことが大切なのです。「自分（親世代）には到底できないから、子ども達にも無理なはず。」と決めつけて、可能性を閉ざしてはいけません。将来は子ども達のためにあります。

議論を活性化させるために

先行事例を見ると、「言葉で議論する素地」を培うためには大切にすべきルールが4つあると言われます。

1つ目は、「何を言っても構わないけれど、人をバカにしたり、傷つけたりする発言だけはNG」。議論においては、とにかく気軽に発言してもらうことが大切です。そのためには「何を言ってもOK」と明言するのが重要なのですが、本当に「なんでもあり」では無法地帯になる。子どもの心理的安全性を守るために、このルールは大前提となります。

2つ目は、「途中で発言をやめてもいい」。特に学校では、手を挙げたら最後、正確な言葉で最後まで発言しなければならない……と、プレッシャーを感じる子どもがいます。こうしたプレッシャーは、自由な議論の妨げになるもの。手を挙げるハードルを極力下げるため、このようなルールが必要です。

3つ目は、「分からないことを聞くのはカッコいい」。大人でもそうですが、「知らない」と言うのを恐れる方がいます。でも、質問をするのは本来、何も恥ずかしいことではありません。話し手はわかりやすい言葉を使い、聞き手は素直に質問する。議論を健全な、活気ある場にするために大切なことです。

4つ目は、「いつも笑顔でいる」こと。簡単そうに思えますが、これを心がけるだけで議論が前向きなものになります。子どもは、楽しくないことはやりません。「考えるのって楽しい」「議論って面白い」と感じてもらうためにも、笑顔で取り組むことが大切です。

「考える」とは

「これは何?」「どこ?」「いつ?」「どちら?」とインプットばかりのアプローチでは、考えるという行為は起こりにくいものです。そこで、次の3つのアプローチを紹介します。

1) 「自分の言葉で語れること (What)」

「この問題の解き方を自分の言葉で言うとうなる?」「この人の言っていることってどういうことだろうね?」「要するにこれはどういうことなんだろうね?」と聞き、自分の言葉で語らせるようにすると頭が働き、考えることが始まります。

2) 「疑問に思うこと (Why)」

「なぜそうなの?」「なぜだと思う?」「どうしてこうなんだろうね?」と問われると人間は考えます。例えば「あなたの住所はどこですか」と聞かれると、頭に入っている知識をアウトプットすればいいので、このときは考えていません。しかし「なぜ、そこに住もうと思ったのですか?」と聞かれると、「あれ、どうしてだったかな」と考え始めます。

3) 「手段や方法を思いつくこと (How)」

「どうしたらいいと思う?」「どう感じた?」など英語で言うHowに関係する質問をすると考え出します。これも単に知識を問うているわけではなく考えないと出てこない質問です。

従来型の「正解主義」の教育は、子どもたちの自己肯定感を失わせる可能性がありました。一方、クリティカル・シンキングを学んだ子どもたちは、「こんなに考えられた自分ってすごい」と思えるようになります。クリティカル・シンキングのコアは「自分の頭で考えること」。考えた結果、「みんなに合わせること」や「黙っていること」が答えならばそれでも構わない。大切なのは「自分」を軸に置くことです。これからを生きる子どもたちには、「叱られたくないから」「保護者を満足させたいから」の呪縛から逃れ、「これでいい」と感じるまで考え抜く力を身につけていきたいと思います。